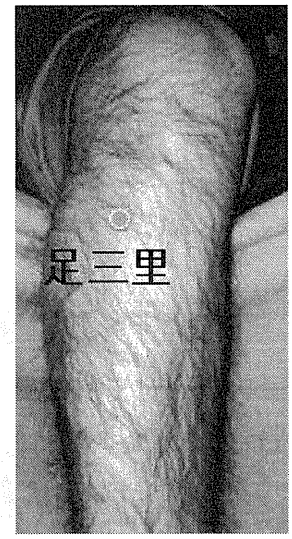
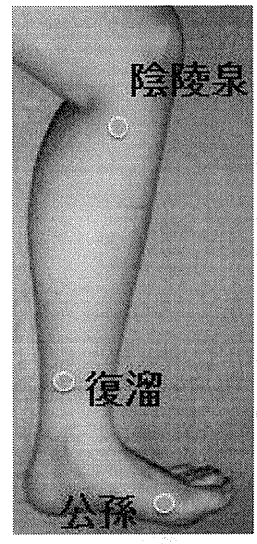
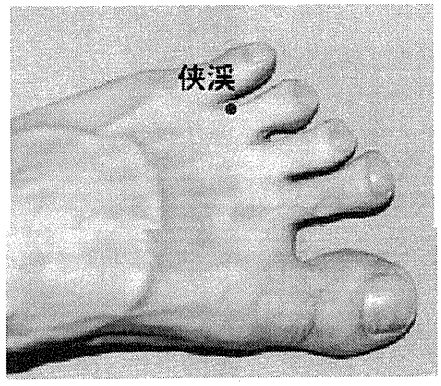
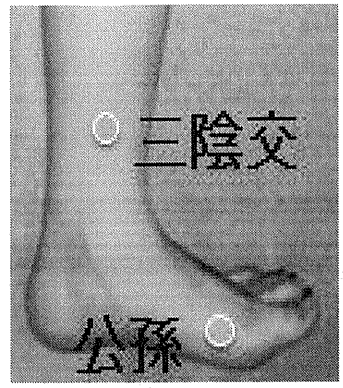
20100006
〈症例〉62 歳、男性　〈傷病〉胃癌、骨転移、大動脈周囲リンパ節転移
〈目的〉医師より、全身倦怠感が強いため軽減を目的に依頼。疼痛はあるが、転移によるものか否かは不明。
〈東洋医学的所見〉
　食事は食べたいが、逆流しやすいため、あまり摂取できない。水分も同様と医師より代返。下肢の冷えが強く、浮腫が足背から下腿全体にある。何度も会話を試みてみるが、「うん」「ああ」といった言葉しか聞くことができず、本人から何が苦痛かは聞く事は最後まで無かった。その為、肝胃不和(逆流性)・脾腎陽虚（食欲不振・浮腫）とし、臓腑弁証に基づいた治療を開始する。
　脈診：数（一息六至)、沈、虚、渋、触診：太白から公孫にかけて軟弱かつ陥凹している。
〈治療方法〉
　使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm)、灸刺激は病院内での施術のため、e-Q(チュウオー製造温灸器)を使用する。温度は低温（47℃±2℃、5 秒）に設定とする。体調に応じて皮膚に接触するだけの鍉鍼を使用した。鍉鍼は補法を目的に金鍼、瀉法を目的に銀鍼を使い分けた。
　使用経穴は毫鍼：陰陵泉、復溜、足三里、e-Q(47.5℃×3)：公孫、円皮針：公孫を使用。
〈結果〉鍼灸治療効果は一切聴取する事はできなかった。また、後日に亡くなられたため、スタッフによる鍼灸治療前後での印象評価も不明。
〈治療開始時の状態〉ターミナル後期



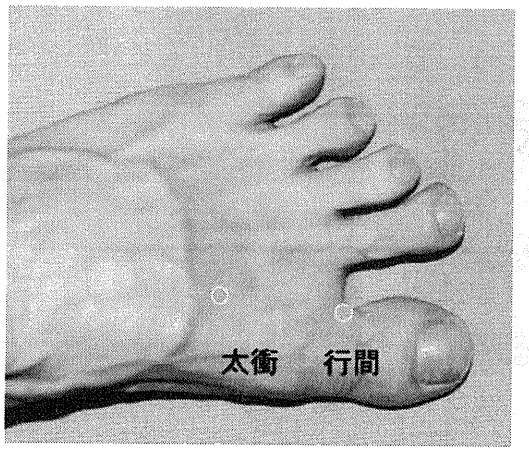


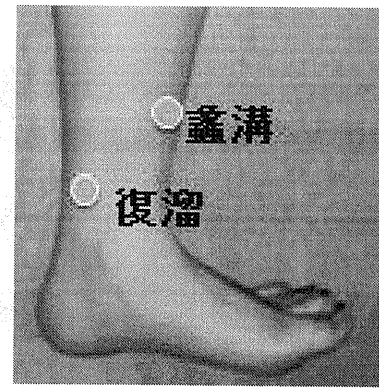
20100007
〈症例〉84 歳、女性　〈傷病〉右肺線癌
〈目的〉右肺線癌の胸膜癒着術後による右胸部(胆経)の痛みの緩和。
〈東洋医学的所見〉
「お乳が痛い」というが、疼痛部位を確認すると、胸部外側(腋窩線上)であった。胸膜癒着という事で肺経の障害も考えた。喉が渇きやすい。突然イライラする。顔が白い、皮と骨と思えるくらい細い。侠渓から臨泣まで軟弱・圧痛、公孫軟弱、三陰交軟弱。八綱弁証：裏熱虚、臓腑弁証：肝腎陰虚、経絡弁証：肺経傷筋、気血津液弁証：気虚・血瘀証と考え、瘀血・右足の少陽経脈病とし活血化瘀・通経を目的に治療を行った。
〈治療方法〉
使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）行う。
使用経穴は侠渓、外関、三陰交、中府を使用。
〈結果〉
患者は話したい事を話すが、評価になると「痛い、痛い」と何度も確認しても、はぐらかされてしまう。初診時「痛い」と言っていたが、治療直後から「痛みはない」と著効が得られた。また、数回ではあるが NRS9→2 まで減少することもあった。
しかし、スタッフに対する攻撃的な発言や、円皮鍼を勝手に取り、ベッドの柵を蹴るなど、行動も攻撃的になってきたため、中止を余儀なくされた。しかし、鍼灸治療を受けてから寝る時までは楽とのこと。
〈治療開始時の状態〉ターミナル中期

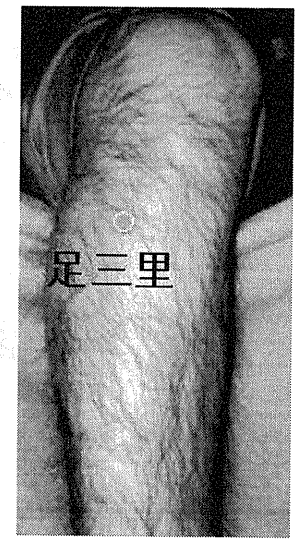




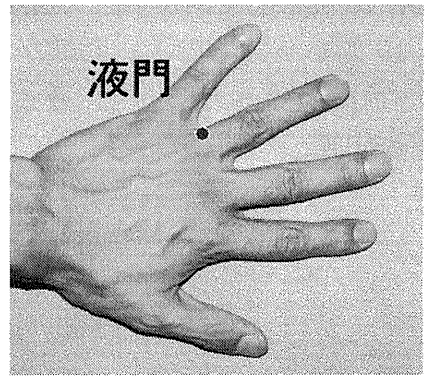
20100008
〈症例〉78 歳、女性　〈傷病〉胃癌（胃噴門部周囲を中心に）。
〈目的〉医師からの依頼は、食欲不振としているが、もともと胃の噴門部の腫瘍のために飲食物が通りにくくなっている事（通過障害）を改善してほしい。
〈東洋医学的所見〉
唾液とともに胃液も上がってきて下にさがる事は無い。昆布をしゃぶる程度（固形物は吐き出す）。また、食道を何かが通過する度に背部に激痛が走るとのこと。 脈診：虚・数・沈・弦、舌診：薄白苔・燥、爪：白線、触診：外関軟弱、内関軟弱、足三里硬結、太白表面軟弱、深部緊張、三陰交軟弱・ 圧痛、太衝表面緊張。下肢の軽度浮腫（圧痕が軽度残る）、イライラしやすい。弁証を肝胃不和とし、臓腑弁証に基づいた治療を行う。
〈治療方法〉
使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）を行った。
使用経穴、毫鍼：行間(瀉)、Lt 太衝(瀉)、蠡溝、足三里(2 番鍼)を使用。
〈結果〉
初診時から痛みが NRS=10 であったものが、治療直後より NRS=0 と著効を示し、全身のだるさもまた緩和することができた。2 日後には徐々に戻ってくるとのことだったが、鍼灸治療を受けてから、下肢のだるさも消失し、自力で動かせることが嬉しいとのこと。
食事中、唾液が通過するだけで NRS=10 の痛みが 10 分以上続いていたが、治療を開始してから NRS=7 の痛みが 10 秒程度と減少となった。しかし、祝日を挟み 1 週間治療期間があくと、体調は悪化。ストレスがたまり、隣室患者とのトラブルを起こしていた。再度週 2 回の治療を開始する事によって、イライラは減少するも、徐々に衰弱していった。
〈治療開始時の状態〉ターミナル中期



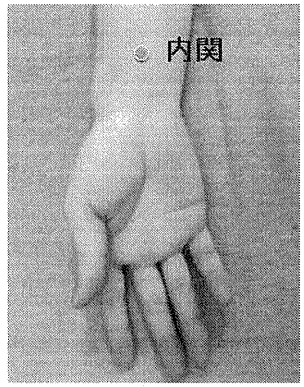


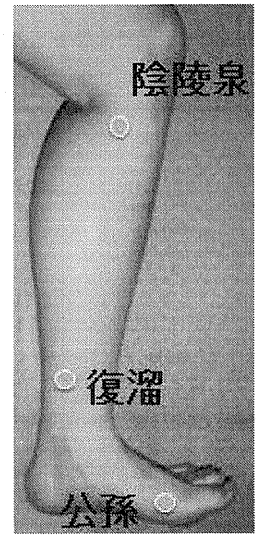


20100009
〈症例〉67 歳、男性　〈傷病〉食道癌、胆のう転移、左肩骨転移。
〈目的〉医師より、左肩甲骨転移による左上肢の痛みに対しての鍼灸治療を依頼された。
〈東洋医学的所見〉
　左肩のどこか、どのように痛いのか等の問診に対し、非協力的な態度で聴取不可能。三焦経、小腸経上と思われるも、非協力的な態度であり、また、脈診も点滴のため取れず、それ以上の詳細は不明。
〈治療方法〉
　使用鍼：直径 0.2mm、長さ 0.6mm（セイリン製円皮針）を使用し、刺入深度は 0.6mm とする。
　使用経穴は Lt 液門を使用。
〈結果〉鍼灸治療を同時に麻薬量も増加しての併用治療であった。研究に非協力であり、中止とした。
〈治療開始時の状態〉ターミナル中期

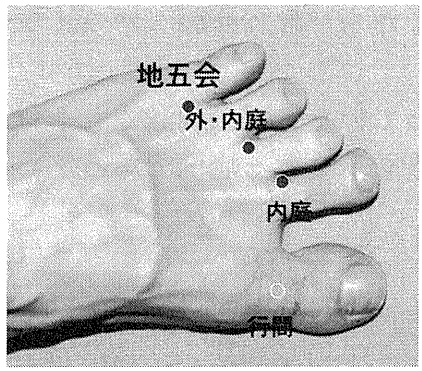


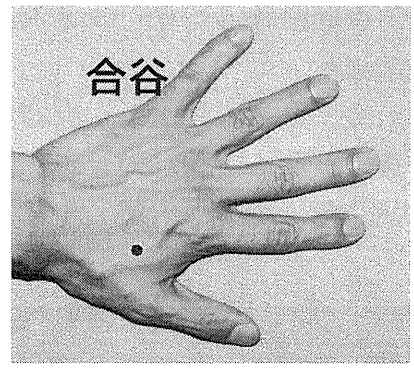
20100010
<症例>86 歳、女性　<傷病>S 状・上行結腸癌。右肺・骨転移
<目的>本人と医師の希望から腸蠕動促進を目的に行う。
<東洋医学的所見>
身体細く、皮膚はやや黒い、舌診：紅舌、乾燥、無苔、舌下静脈怒張。初診時より、声が弱く、低い、聞き取りにくい。耳も聞こえにくく、何度か「え？」と確認される。
胸脇部に少し詰まった感じがあり、触診：期門に圧痛。夜間はそれなりに眠れる時がある。便秘傾向で、2～3 日出ないとのこと。薬や看護師らによる摘便が行われていた。脾腎の両虚
<治療方法>
使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）、灸刺激は病院内での施術のため、e-Q（チュウオー製造温灸器）を使用する。温度は低温（47℃±2℃、5 秒）に設定とする。体調に応じて皮膚に接触するだけの鍉鍼を使用した。鍉鍼は補法を目的に金鍼、瀉法を目的に銀鍼を使い分けた。
使用経穴は毫鍼：陰陵泉、復溜、足三里、e-Q（47.5℃×3）：復溜 陰陵泉 湧泉 足三里、円皮針：内関、足三里を使用。
<結果>便通は服薬等との併用により改善に向かい、中途より L4～5 のヘルニアによる右下肢後面痛に対して行う。NRS=10 であったものが、回数が増えていく事で、NRS=7 の痛みとなり、治療直後には NRS=2～3 程度の痛みとなった。徐々に改善傾向に向かっていた。
<治療開始時の状態>ターミナル中期

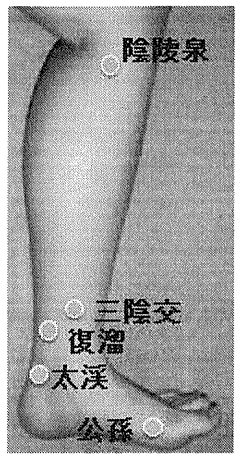




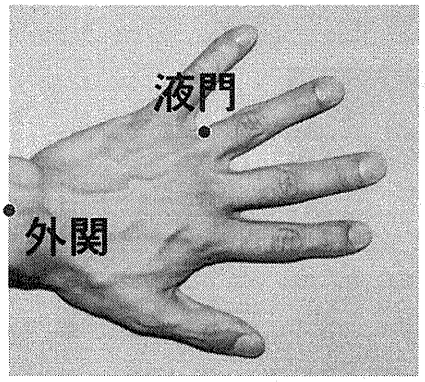
20100011
<症例>73 歳、男性　<傷病>膀胱癌、多発性骨転移
<目的>医師よりの依頼ではなく、本人の希望から「イライラ」「倦怠感」を何とかしてほしいとのこと。
<東洋医学的所見>
　イライラしやすく、ゲップもしやすい、お腹も下しやすくなった（パウチ交換などで長時間腹部を出している事も原因の一つ)、胸のあたりが詰まった感じがする、入浴後は気持ちいいのだが、体的には酷く疲れている。夜中 2～3 時に目が覚める事も度々ある。脾腎陽虚・肝鬱気滞と診断した。脈診：数、沈、虚、微弦。舌診：暗淡白、白膩苔、舌下静脈の怒張あり。
<治療方法>
　使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度 (1～4mm)、灸刺激は病院内での施術のため、e-Q(チュウオー製造温灸器)を使用する。温度は低温（47℃±2℃、5 秒）に設定とする。
　使用経穴は毫鍼：内庭、外内庭、地五会、足三里、三陰交、復溜、太渓、合谷、行間、公孫、e-Q(47.5℃×3)：足三里、時に太渓を使用。
<結果>初診時、治療直後から次の日の朝まで楽だったとのこと。前半での訴えは全身倦怠感であったが、後半ではストレスによる苛立ちの緩和を強く希望された。苛立ちが強くなる時は「頭のてっぺんから何か抜けていくような感じがある」との事だったが、治療直後の苛立ちは緩和され、「少し落ち着いて眠くなった」と入眠する事が増えていった。
<治療開始時の状態>ターミナル中期

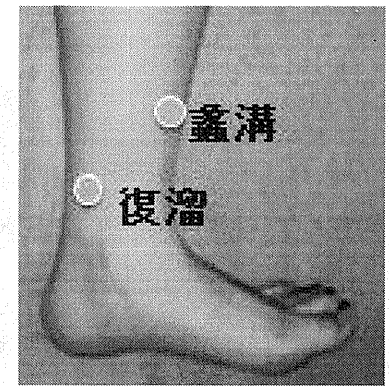


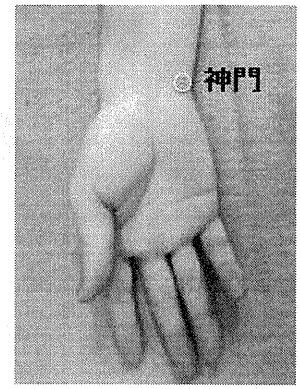




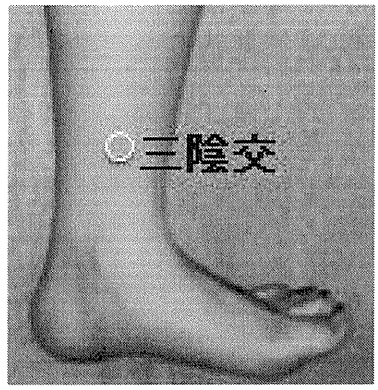
20100012
〈症例〉63 歳、女性　〈傷病〉左乳癌術後、肝・肺・リンパ節転移
〈目的〉化学療法による副作用（全身倦怠感など）、術後疼痛に対し、改善を目的に依頼される。
〈東洋医学的所見〉
　胸脇部の張った感覚、イライラしやすい、ゲップがでやすい、肩に張った様な頑固なこりがあるという事から肝鬱気滞が強い、左脇の術後によるつっぱり感を足少陽経筋病ととらえる。冷たい飲み物を好む。便秘が多く、下剤を飲むため便秘と下痢を繰り返している。寝汗が多い。
　裏虚熱、肝鬱気滞・腎陰虚、経筋病：左足少陽経筋病、気滞・血瘀証と考え、右上肢は経筋治療、その他愁訴に対しては臓腑弁証に基づき、患者本人の希望も含め、四肢末端の経穴を使用した治療を開始する。
〈治療方法〉
　使用鍼：皮膚に接触するだけの鍉鍼を使用した。鍉鍼は補法を目的に金鍼、瀉法を目的に銀鍼を使い分けた。
　使用経穴は三陰交または蠡溝、復溜、外関または液門、神門を使用。
〈評価・結果〉M.D.アンダーソン、OHQ57（11 月 11 日～12 月 20 日）、NRS を使用。
鍼灸治療前半で行われていた、左乳癌術後疼痛に対する OHQ 評価（11 月 11 日～12 月 20 日）では、鍼灸治療開始前の異常所見である便秘、不眠、症状が移動する、内出血、頑固なこり、お腹の調子などが緩和された。しかし、死前期になるにつれ逆に体の冷え、温飲を好むといった陽虚所見が強く出現していた。
また、死前期に入るころに休日など治療期間があいた事により、急速に悪化。
死に対する不安、恐怖が強くなり、呼吸が苦しくなる、眠れない、イライラする、といった所見も出現し始めた。
　本症例では使用鍼を患者希望により鍉鍼で行っていた。軽微刺激でも十分な結果が得られた事で、患者負担がなく緩和ができると言う事を示唆する症例であった。
〈治療開始時の状態〉ターミナル中期

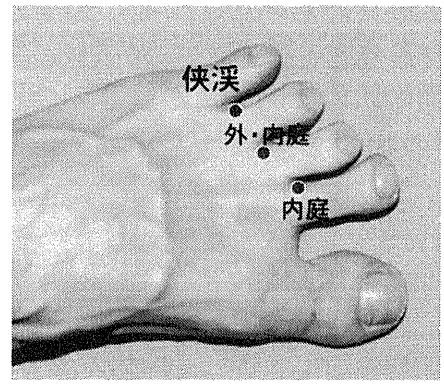




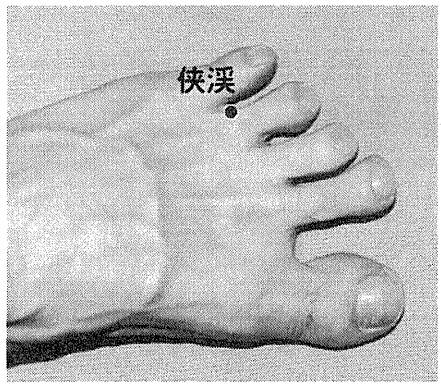


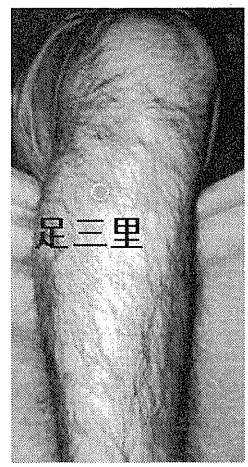
20100013
〈症例〉72 歳、男性　〈傷病〉副腎・肺・Th6～7 脊椎転移
〈目的〉医師より、麻薬を使用しても背部痛の疼痛緩和が不十分なため依頼された。
〈東洋医学的所見〉
右側臥位が一番楽なため、1 日の殆どがその体制。18 日から、プレガバリンに変更し、レスキューの回数は減ったものの痛みを訴える事がある。足背熱感、Th6～7 侠脊穴の痛み。足三里緊張、三陰交硬結、太衝緊張圧痛、Lt 胆経緊張。
脈診：浮・遅（54 回/分）・滑・右関上微弦、舌診：紅舌・無苔。裏熱虚、腎陰虚、左足少陽経脈病、血瘀証と診断した。
〈治療方法〉
使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）、衣服を脱がし患部を出すことができないことが多かったため、背部は皮膚に接触するだけの鍉鍼を使用した。
使用経穴は毫鍼：三陰交、内庭、外内庭、侠渓、鍉鍼：Ｔｈ6～7 侠脊穴を使用。
〈結果〉
三陰交、内庭、外内庭、侠渓を毫鍼、Th6～7 に鍉鍼を使用する。初診時より、NRS=8 の痛みが NRS=0 と消失をみせた。第 2 診目には痛みは半減し、その後 NRS=1 まで緩和する事ができた。亡くなる直前に NRS=8 まで痛みが増悪し、レスキューを使用するも NRS=6 程度まで緩和されるだけで、効果が切れると NRS=8 まで戻り、安眠できないという状態であったが、1 回の鍼灸治療にて痛みの消失効果を得る事ができ、直後から睡眠に入られていた。
本症例は、経絡上末端にある経穴に対し、軽微刺激を行う事で、患者負担もなく、著効がみられた症例であった。
〈治療開始時の状態〉ターミナル中期

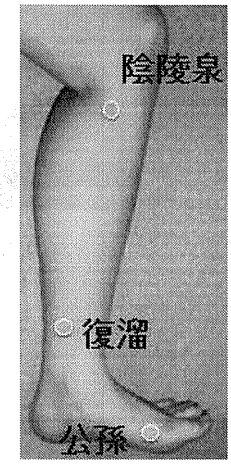




20100014
<症例>80歳、女性　<傷病>膵臓癌
<目的>医師より、腹部の疼痛に対しロキソプロフェンナトリウムでの対応のため、少しでも現状維持ができればということで依頼された。
<東洋医学的所見>
夜間、特に痛みが増悪する時がある。側臥位で軽減。食欲はないわけではなく、ただ好みの食事ではないので食べない時がある。触診：足三里硬結、公孫軟弱、蠡溝軟弱、寒がり、言葉に力がない、顔に血の気がない。痛みの程度は、弱い時NRS=2、強い時NRS=5の波のある痛みであったが、NRS=1～2程度となり疼痛コントロールが以前よりできていた。
<治療方法>
使用鍼：直径0.12mm、長さ15mm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）を行う。足三里には直径0.18mm、長さ50mmを使用、刺入深度10mmの施術を行う。また、体調に応じて皮膚に接触するだけの鍉鍼を使用した。鍉鍼は補法を目的に金鍼、瀉法を目的に銀鍼を使い分けた。
使用経穴は毫鍼：陰陵泉、復溜、足三里、脾兪、e-Q(47.5℃×3)：公孫、円皮針：侠渓を使用。
<結果>
鍼灸治療介入時、直後変化を問うも、疼痛コントロールができている状態であったため、「特に変化が無い」とのことだった。しかしながら、服薬効果が切れ始めるころになると、痛みが出現。(NRS=2～3) 治療回数を重ねて行く度に、痛みの出現する強さがマシになってきているとのことであったが、それ以外にも身体的変化として、歩いていても足が楽だったというコメントがあった。その後、積極的にリハビリも行っていたようだったが、休日と重なり、治療期間があくと、ベッドから起き上がるのも辛い状態になっていた。
死前期直前、呼吸も荒く、コミュニケーションをとれる状態ではなかったため、鍼灸を受ける状態ではないと説明するが治療を強く希望され、鍉鍼による治療を行うと「足の裏が温かくなってきた」と呼吸も安定し、僅かだが笑顔も見せた。
危篤状態直前の状態であったが、著効のみられた症例であった。
<治療開始時の状態>ターミナル中期～後期







20100015

〈症例〉74 歳、男性　〈傷病〉中咽頭癌、頚部リンパ節転移

〈目的〉頚部リンパ節転移による頚部、腰部の疼痛緩和・誤嚥性肺炎予防・圧迫骨折による疼痛緩和を目的とする。

〈東洋医学的所見〉動くと傷みが増す、薬を飲んでいるのであまり強い痛みは感じないが主にズキッとした痛みを中心に重だるい・つっぱった感じもある。頚部・腰部ともに遊走性の痛みがあり、喉が乾きやすい、動くと痛いので殆ど動いていない。下肢冷感あり。

裏熱虚、足陽明経脈病、気滞血瘀証と診断した。

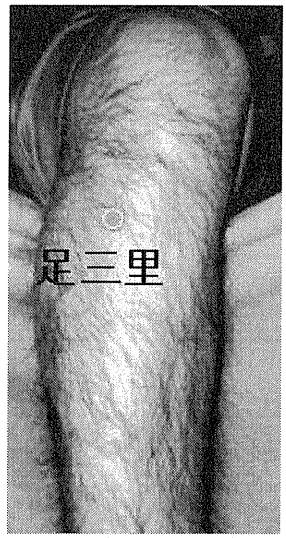
〈治療方法〉

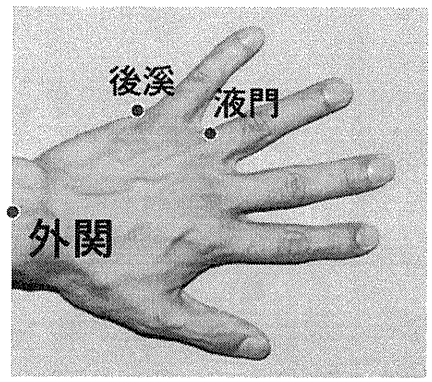
使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）を行う。足三里には直径 0.18mm、長さ 50mm を使用、刺入深度 10mm の施術を行う。また、体調に応じて皮膚に接触するだけの鍉鍼を使用した。鍉鍼は補法を目的に金鍼、瀉法を目的に銀鍼を使い分けた。

使用経穴は毫鍼：液門、外関、後渓、足三里を使用。

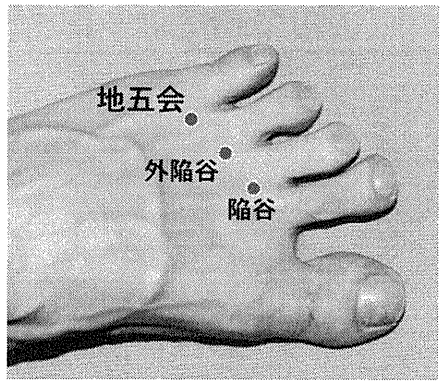
〈結果〉

NRS=3 程度の持続した痛みが頚部に起こっていたが、鍼灸治療を介入させることで痛みに波がでてきた。痛みのない状態が出てきた。しかしながら、治療 3 回目には、会話が成り立たなくなり、評価を中断するも継続して治療を行った。患者家族より、「苦痛表情はなかった」との事から、投薬と併用する事で疼痛コントロールが可能となった症例である。

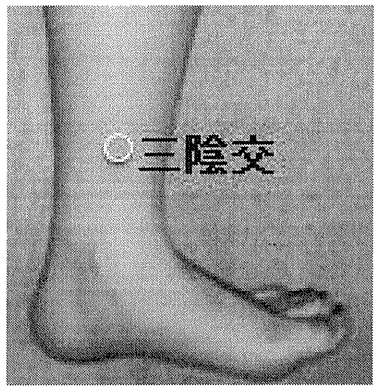


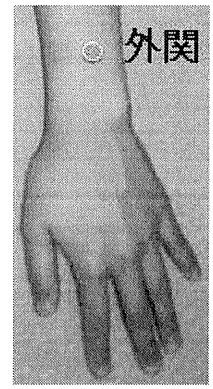


20100016
〈症例〉67 歳、男性　〈傷病〉左腎臓がん、肺転移、転移性骨腫瘍
〈目的〉他の患者で癌性疼痛緩和に著効がみられたので Th6～7 にみられる癌性疼痛に対して行う
〈東洋医学的所見〉
　ズキズキした痛み。昼夜問わず常に痛みが同じ部位にある。本日は服薬して間もないのでどれくらい痛いか不明である。下肢が動かせないままベッド上の生活。皮膚全体が黒く、カサカサしている。裏熱虚実錯雑、肝鬱気滞・腎虚証、血瘀・気滞・気虚と考え、疏肝理気を中心に治療を行った。
〈治療方法〉
　使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）、灸刺激は病院内での施術のため、e-Q（チュウオー製造温灸器）を使用する。温度は低温（47℃±2℃、5 秒）に設定とする。背部には鍉鍼を使用した。鍉鍼は補法を目的に金鍼を使う。
　使用経穴は毫鍼：陥谷、外陥谷、地五会、三陰交、鍉鍼：Th6～7 侠脊穴を使用。
〈結果〉
　治療回数は全 3 回と少ないが、初診時患者本人は変化が無いと言っていたが、主治医からは「治療の次の日は痛みを訴えてくることはなかった」とコメントがあった。
しかし、既に死前期に入られていた為、2 診目では NRS=9、治療後 NRS=8 と直後効果は見られず、また、3 診目では危篤脈がでており、治療を行える状態ではなかった。なお、家族より、苦しまずに逝けてよかったとコメントあり。
〈治療開始時の状態〉ターミナル中期

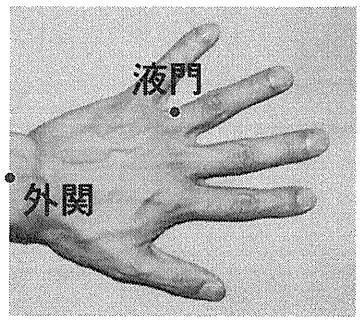


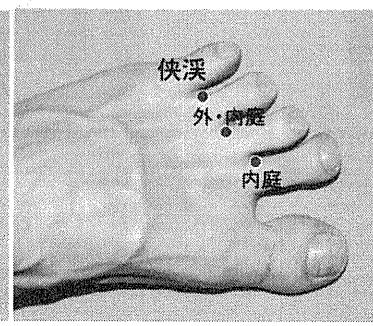
20100017
〈症例〉62 歳、男性　〈傷病〉下咽頭癌
〈目的〉右頸部痛、投薬の効果が切れた時にできる限り緩和している状態にと依頼される。
〈東洋医学的所見〉
　咽頭摘出のため筆談のみ。右頚部が癌のせいでズキッといたみ、手術の後遺症で引き攣った痛みが強い。三焦経上であった。常に痛みがあり、投薬で鎮痛している。疼痛部位および、状態より裏熱虚、手少陽経脈病、血瘀と診断した。
〈治療方法〉
　使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）、体調、部位によって鍉鍼を使用。鍉鍼は補法を目的に金鍼、寫法を目的に銀鍼を使用した。
　使用経穴は外関、三陰交、裏三里を使用。
〈結果〉
　開始当初は治療前後であまり変化が得られなかったが、回数が進むにつれ、僅かではあるが治療前後で変化が見られるようになった。しかし、咽頭癌術後患者は「声が出せない」といったストレスが強いため、治療効果を望むのは非常に難しいと考えられた。鍼灸治療効果時間は直後から 1 時間程度のみ。
〈治療開始時の状態〉ターミナル後期

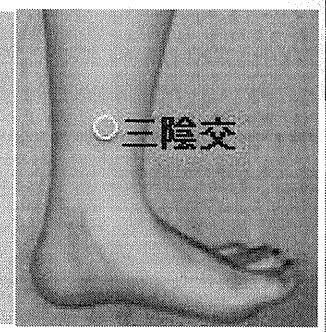




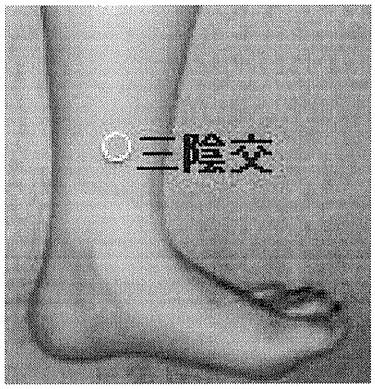
20100018
〈症例〉74 歳、男性　〈傷病〉非ホジキン病
〈目的〉鎮痛薬の効果が切れると左上腕の痛みが出現するため依頼
〈東洋医学的所見〉
　重力がかからなければ、痛みなく外旋、内旋できる。しかし、少しでも重力がかかると重だるく痛む。服薬によって痛みはないが、疼くような感じがある。夜間に痛みが強くなる。食欲は低下傾向。盗汗あり（本人も驚くほど）。下肢麻棒のため足背部の浮腫があり、リハビリ週 1 回、それ以外は看護師によるマッサージが行われている。裏寒虚実錯雑、肝脾不和、手少陽経脈病、気滞・血瘀と診断した。
〈治療方法〉
　使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）、足三里には直径 0.18mm、長さ 50mm を使用し、刺入深度 10mm にて行う。
　使用経穴は液門または外関、三陰交、内庭、外内庭、侠渓、足三里を使用。
〈結果〉上腕の痛みは経絡的に末端部に配穴を行い、2 穴を選穴し治療を行った。初診時、治療直後「あまり変化はない」と患者本人は言っていたが、明らかに腕を挙上した時の苦痛表情が無くなっていた。治療回数を増やすごとに、痛みが消失し、ダルさが残っていたが、20 診目で完全に消失したことから終了と判断（筋力低下による、物を保持した時のだるさはある）。
　経過観察と共に、下腿浮腫に対しての治療を開始。低栄養であるため、食欲を上げる治療を行う。食欲は上昇したが、胸水、心室に水の貯留が確認される。
4 月より傾眠傾向が強くなった。
　上肢の痛み、ダルさは筋力低下を除外して考えると、鍼灸治療介入する事により症状は軽減され、1 カ月経過した頃から上肢の痛みは消失し、経過観察内（全身状態の治療のみ）でも痛みが再発する事はなかった。
〈治療開始時の状態〉ターミナル中期

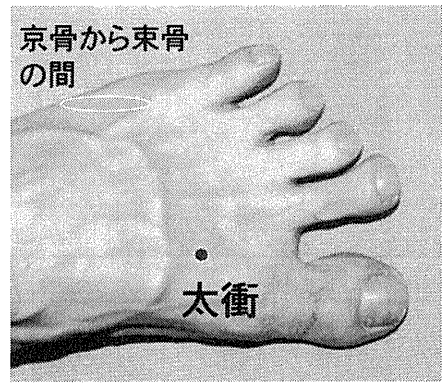


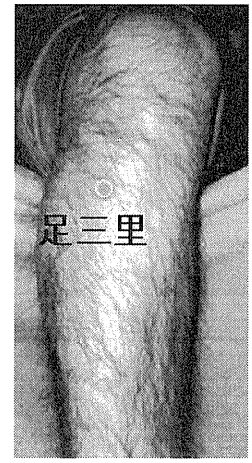




20100019
〈症例〉86 歳、男性　〈傷病〉脾臓癌、肝転移
〈目的〉医師より癌性疼痛ではないため麻薬を投与する事も出来ないので、腰部の痛みに対する症状の緩和を依頼される
〈東洋医学的所見〉
2 月 9 日から腰の痛みが増す。(NRS=4～5)、痛みの性質は重だるい、張った様な痛み。昔から同じ痛みあり。しかし、ここ最近はなく、急に再発した。部位 L2～3 相当（腎兪付近)。食：前の病院では食べられず 20kg 減少するが、ここにきて 3kg 戻った。便：酷い時は 1 週間でない。今は薬で 3 日に 1 回無理やり出している。下腿冷えあり、触診：太渓軟弱、後渓に索状硬結、下腿胃経緊張。裏寒熱・虚実錯雑、脾腎陽虚、足の太陽経脈病、気虚・気滞血瘀証と診断した。腰部の痛みに対し、経脈病の改善を目的として経絡上の末梢経穴を使用、全身状態の改善のため活血化瘀の治療を開始する。
〈治療方法〉
使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm)、足三里には直径 0.18mm、長さ 50mm を使用し、刺入深度 10mm にて行う。
使用経穴は太衝、後渓、三陰交、足三里、京骨と束骨の間を使用。
〈結果〉
腰部の痛みは開始当初 4～5 程度であったが、治療前後で死前期になるにつれて NRS=5～8 の強い痛みが出現することがあったが、治療直後には NRS=0～2 と改善傾向がみられた。死前期には痛みだけでなく、強い便秘となり、それに対する治療も行っていたが、とにかく病院食が合わないという事で食さなくなったのが大きな原因の一つだった。問診時に「どんなものなら食べられますか？」と尋ね、食べられるものを患者から聴取できたが、スタッフと話す機会を持てず、時間が経ってしまった。もっと早めにスタッフと相談し、対策がとれたのでは考える。
鍼灸治療効果は 1 日から 2 日目の朝に、以前ほどではないが痛みが戻ってくるとのことだった。
〈治療開始時の状態〉ターミナル中期







20100020

〈症例〉71 歳、男性　〈傷病〉下咽頭癌

〈目的〉肩甲間部から頚部にかけて引っ張られたような痛みがあるため、鎮痛を目的とする。

〈東洋医学的所見〉

筆談のみのため、詳細を聞くと腕がだるくなることで必要以上の内容を聴取する事はできなかった。寝方が悪いのか、左右のケンビキ（肩甲間部）の筋が引っ張られる痛み（L>R）。体の向きによってはだるく感じる。 左手の浮腫あり（点滴による可能性も…）、こむら返りも起しかける事度々ある。下腿浮腫。目がかすみやすい。顔色：黒。裏寒虚実錯雑、肝血虚、腎気虚、手太陽経脈病、手足少陽経脈病、気虚・血瘀と診断し、肩の痛みは経脈病の改善を目的として経絡上の末端経穴にて治療を行う。

〈治療方法〉

使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）、足三里には直径 0.18mm、長さ 50mm を使用し、刺入深度 10mm にて行う。ただし、状態経過に応じて鍉鍼（金鍼）治療に切り替えて、治療を行った。

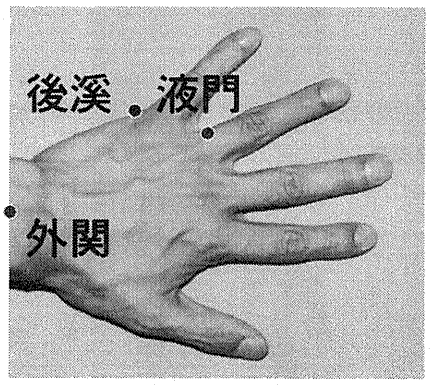
使用経穴は液門または外関、後渓、侠渓、太渓、三陰交を使用。

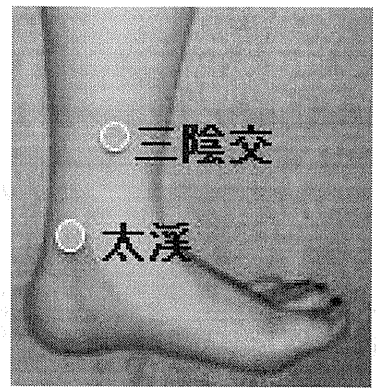
〈結果〉

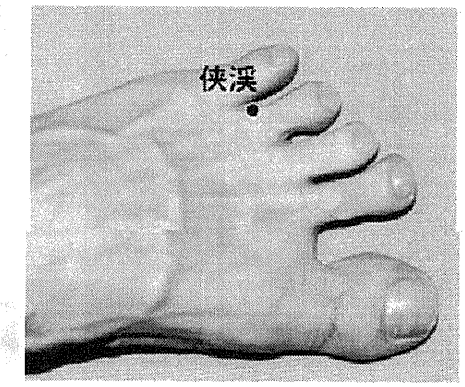
初診時から、治療前後で軽減がみられた。回数を重ねる事で NRS=5～7→2 と大きく変化する事もあった。しかし、その事で、患者の中で「もっとしてもらったら治る」という考えが生まれ、何度も説明するも、治療後は必要に追加治療を迫られ、気をつけて行うも、過剰刺激となり、倦怠感が強くなる事もあった。また、『話す事の出来ない』ストレス、死への不安感を家族に打ち明けられない悩みも募っていき、スタッフへの要求が強まっていった。死前期はフルルビプロフェンアキセチル朝、夕の中心静脈注射施行により疼痛コントロールができていた。

今回の症例を含め、咽頭癌患者は「話せない」ストレスが解消されない限り、七情の乱れを整える事は出来ず、効果的な除痛は非常に難しいことを痛感した。鍼灸治療効果の持続は直後から 3 時間程度。

〈治療開始時の状態〉ターミナル中期

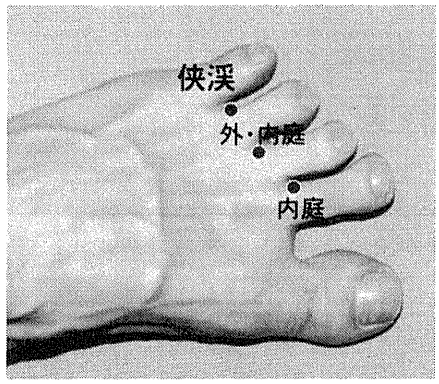


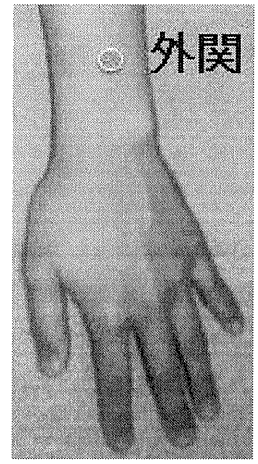




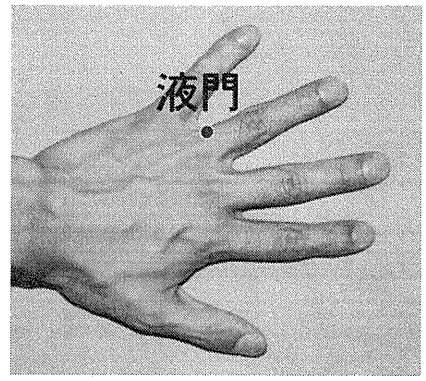
20100021
〈症例〉85 歳、男性　〈傷病〉下咽頭癌
〈目的〉ベッドのギャッギアップする（上半身を起こす）際に苦痛表情あり、疼痛緩和を目的に行う。
〈東洋医学的所見〉
　気管チューブのため、話す事できない。痛み・苦痛を訴える際はどのタイミングで訴えるか看護師でも分からない。ただ、注入時のベッドのギャッギアップの際によく苦痛表情を見せるとのこと。皮膚は色黒く、問いかけに対しては首を軽く振る程度。特に運動機能に異常はないが、体力が殆んどなく腕を動かす事もできない。陽明経の熱が強い
　状態が時間をかけて見られないため、少ない情報から裏寒虚、腎虚、足陽明経脈病、気虚・血瘀と診断し、通経活絡を目的に円皮鍼による軽微刺激にて行う。
〈治療方法〉
　使用鍼：直径 0.2mm、長さ 0.6mm（セイリン製：円皮鍼）を使用して行う。
　使用経穴は外関、内庭、外内庭、侠渓を使用。

〈結果〉
　疼痛の有無以外、一切のコミュニケーションがとれず。唯一の評価は看護師によるギャッギアップ時の表情のみであった。1 診目の直後効果は不明であったが、2 診目までの看護記録からはギャッギアップ時の苦痛表情が無くなっていたとのこと。鍼灸治療効果の持続時間は 1 日。
〈治療開始時の状態〉ターミナル後期

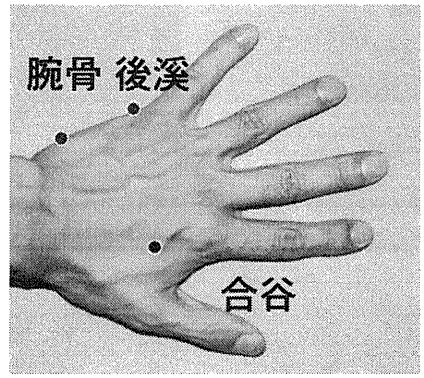




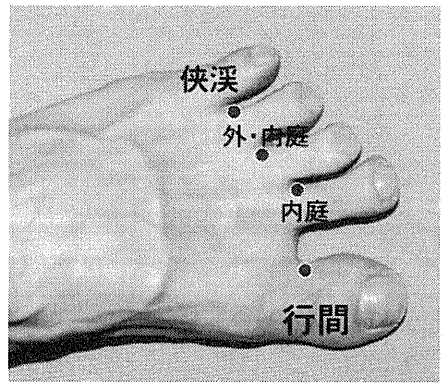
20100022
〈症例〉94 歳、男性　〈病傷病〉肺癌・C3～4 骨転移
〈目的〉頚部の癌性疼痛緩和
〈東洋医学的所見〉
　患者本人は「あーー」という呻吟と首の振り方で痛みを訴えるのみ。評価は看護師のカルテ記載から評価。初診時、睡眠中であったため、どこが痛いのか不明瞭。また、寝起きであったため、脈診や、配穴をするために触れると直ぐに振り払われる。医師からだいたいの疼痛部位を確認し、三焦経、小腸経の異常と考え、症状の強い三焦経より行う。
〈治療方法〉
　使用鍼：突然の体動があるため、鍉鍼（金鍼）にて治療を行った。
　使用経穴は液門を使用。
〈結果〉
　1 診目、触れると直ぐに振り払われたりしたので、殆ど何もせず終わる。（上肢は点滴による浮腫がありできなかった）患者の次女から 3 月 2 日に「入院時より、呻吟が軽減している事に安心している」とのコメントがあった。2 診目、軽度刺激により覚醒あり、治療を行った後、睡眠に入られる。
　2 診目後日（約 24 時間後）に看護師による疼痛確認に対し、首を横に振った事から痛みは緩和されていると判断された。
〈治療開始時の状態〉ターミナル後期

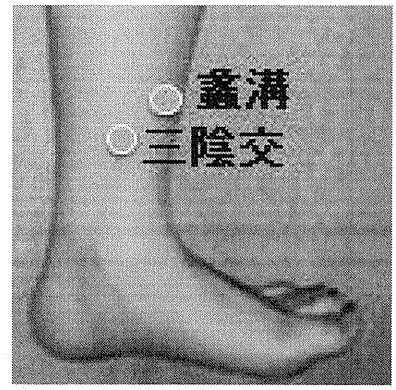
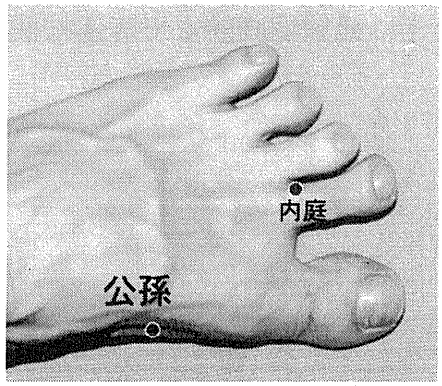
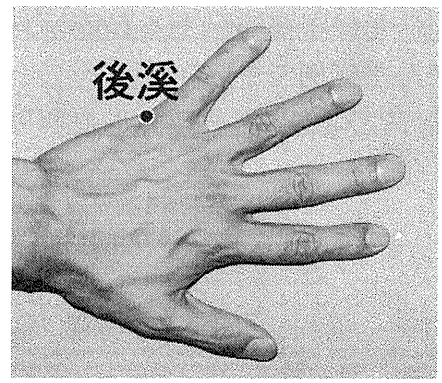
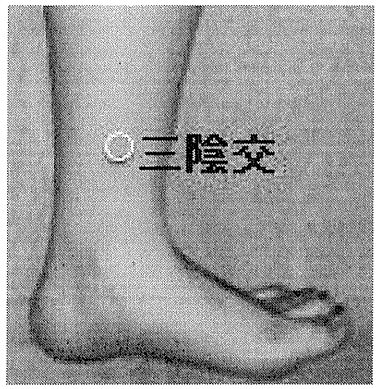
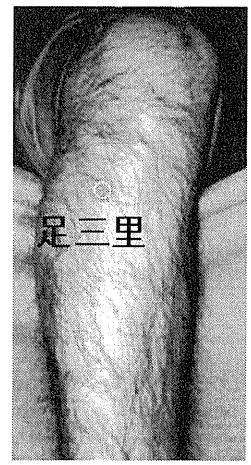


20100023　背部経穴追加
〈症例〉69 歳、男性　〈傷病〉食道癌、肺・縦隔リンパ節・腎転移
〈目的〉肩甲間部から背部の癌性疼痛緩和し、患者本人も投薬の減量を望んでいるため主治医より依頼
〈東洋医学的所見〉
鍼灸治療介入当初では触診：菱形筋の緊張、膈兪から肝兪にかけて痛みあり。喉が詰まった感じがするという。イライラしやすい、飲酒を好むことから、裏虚実共雑寒熱錯雑、肝胃不和、気虚・気滞・血瘀と診断した。治則を疏肝理気とした。
〈治療方法〉
使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）とする。体調に応じて皮膚に接触するだけの鍉鍼を使用した。鍉鍼は補法には金製、瀉法には銀製を使用。
使用経穴はその日の患者状態に応じて、後溪または腕骨、膈兪、肝兪、胃兪、風池、合谷とした。飲酒を好み、外泊時には必ず宴会をしていたということもあり、外泊後には下腿に浮腫が認められ、陰陵泉を追加した。
〈結果〉常に重だるい様な痛みがあり、身体を動かしても張り付いているような感じという症状に対し、鍼灸治療を介入した。治療前後では痛みの変化は NRS6～7→NRS6～7 と変化が全く認められない。しかしながら、痛みの部位は肩甲骨の間から、胃兪・胃倉まで位置が動いており、患者本人も「さっきと位置が動いた。さっきのところは痛くない」と驚いていた。また、宴会後は必ず便秘を起こし、下剤を処方されるも気休め程度で殆ど出ることはないということだったが、「鍼灸治療を始めてから下剤を飲まなくても出た」という変化が認められた。麻薬の投薬量は死前期に向け、増量していった。
印象としては「死」に対しての恐怖感が非常に強く、眠れない日々が増えていたこと、不安性呼吸困難もあったが、鍼灸治療を受ける間は落ち着き、治療中入眠に入られることが多々見られたことから、やや有効であった症例と考える。
〈治療開始時の状態〉ターミナル中期



20100024
〈症例〉79 歳、女性　〈傷病〉腎臓癌（術後）、仙骨転移
〈目的〉仙骨転移による足先の痺れ
〈東洋医学的所見〉
鍼灸治療介入時、左大腿後面から下腿外側にかけてベッドから起き上がる時にズキッとした痛みもあるが、投薬直後のため痛みはなく、痺れを中心に行っていくことにした。痺れは全体的にあるが、細かく調べると左右共に第 5 趾（胆経、膀胱経）外側が強く痺れるとのこと。痺れがきつく歩かずにいたため、ストレスが強く、日中でもウトウトした感じが常にあった。
裏虚熱、足少陽・太陽経脈病、気虚・血虚と診断した。
〈治療方法〉
使用鍼：直径 0.12mm、長さ 15mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）とする。体調に応じて皮膚に接触するだけの鍉鍼を使用した。鍉鍼は補法には金製、瀉法には銀製を使用。
使用経穴はその日の患者の状態に応じて、行間、内庭、外・内庭、侠渓、蠡溝。後日、活血化瘀のために三陰交を追加。
〈結果〉一回の治療では直後効果は不明だったが、時間をおいたところ、以前よりも楽であった事を自覚、また、手の震えが以前より落ち着き、継続的治療を望まれた。気虚・血虚に対しての治療数を重ねていくことで、NRS=6～7→2～3 まで軽減。しかし、NRS=2～3 以下になることは治療直後でもなかった。そこで、舌下静脈の怒張、細絡、爪の血色の悪さから瘀血と判断し、活血化瘀の治療を追加したところ、治療直後 NRS=1 と減少できた。
さらには、治療介入時よりも院内を散歩する事が多くなり、活動的になってきたことからも、著効の認められた 1 例と言える。
〈治療開始時の状態〉ターミナル前期





20100025
〈症例〉87 歳、男性。　〈傷病〉胃癌（一部切除）
〈目的〉肩こりで看護スタッフからドクターに依頼がされた
〈東洋医学的所見〉
鍼灸治療介入時、症状に関して質問するが、「揉んでもらうと気持ちいいだけで、これと言って日常生活で困っているほどではない。強いていうなら、食事をしても戻ってくるくらい」という、依頼とは異なるものだった。脈診：胃の滑、舌診：淡紅舌、白膩苔、甘い物を好む。肩は張ったような感じという事から、気虚・気滞と考え、疏肝理気を目的に始める。
〈治療方法〉
使用鍼：鍼灸治療が初めてだということで、鍉鍼を中心に使用。補法には金製、瀉法には銀製を使用。
使用経穴は 1 診目、合谷、後溪、公孫、2 診目、内庭、三陰交、足三里を使用。
〈結果〉
今回、依頼目的は生活に支障がないというものであり、「全然平気やで。何ともないけど揉んでもらったら気持ちがいいだけ」と評価もとることはできなかった。また、食欲低下も患者本人は苦痛に感じてはいなかったため、NRS=0。しかし、鍼灸治療 2 回の治療を行った後、食欲が少し増したことで、狭窄していた箇所のステント留置を行うため、他病院への一時的転院するに至った。
〈治療開始時の状態〉ターミナル中期